図解・戦前戦中の生活

食

節米料理
主食の中心は雑炊、粥、すいとんに。
イモのツルや種、野草なども入れた

一升瓶と米つき棒
配給は玄米だったため、
一升瓶に入れて米つき棒（はたきの柄など）を
使って精米していた

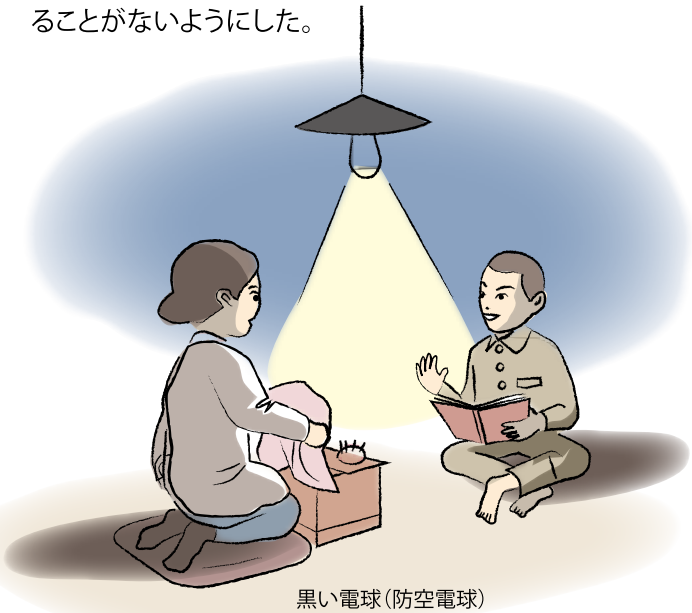
戦争がだんだん激しくなると、食糧難は深刻になり、「ごはん＝白米」は大変貴重になった。物資は配給制となり、南瓜（カボチャ）や甘藷（サツマイモ）、小麦のふすまなどを米の「代用食」として食べるようになった。少量の米を粥や雑炊でかさ増しし、耕せるところは道路の脇でも耕して畑を作った。荻窪の駅前にもあったという「雑炊食堂」は、政府の発行する外食券なしに食べられる食堂として、いつも行列だったという。人々は「欲しがりません勝つまでは」と飢えをしのいだが、食料事情は戦後さらに悪化することになった。

軍隊にいる父親から集団疎開地にいる息子に宛てられたはがき。
はがきは現在のものより一回り小さい
（資料提供：白井靖朗さん）

（写真提供：田村直幸さん）

くらしの工夫

あらゆる物資が不足していくなかで、代用品や家事の工夫が生まれる。戦艦や弾丸の材料として回収された金属の代わりに、木や竹、陶器や布などの素材が使用されるようになる。石鹸も不足したため「灰汁（あく）洗い」することもあった。夜間の空襲に備えた灯火管制のもと、窓や照明を黒い布で覆って、明かりが漏れて攻撃の標的になることがないようにした。

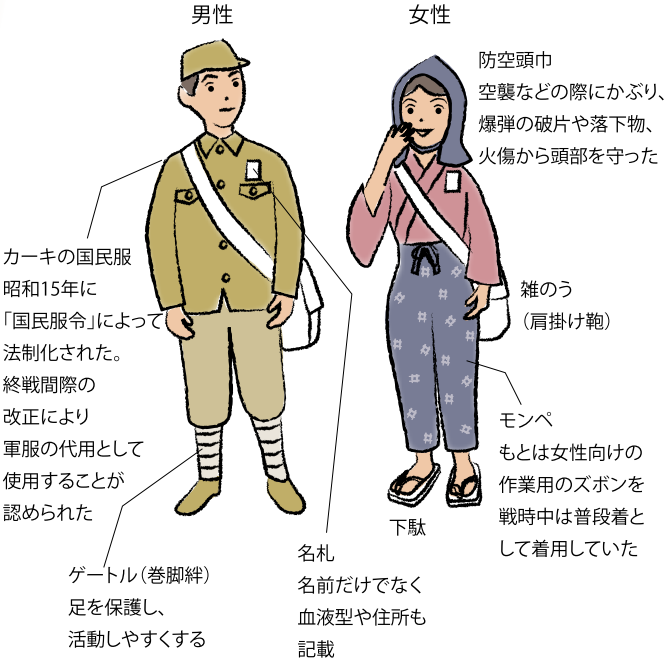


黒い電球（防空電球）
布や笠を使って明かりの漏れを防いだほか、
側面が黒塗りされた電球も登場した

家族

三世代がひとつ屋根の下に暮らしていた昭和期。戦争が進むにつれ、父や兄は出征し、姉は軍需工場で働き、妹弟は地方へ疎開するなど、家族の姿は変わっていく。母は出征中の家族の分も「陰膳（かげぜん）」を据え、皆の無事を願った。親戚づきあいとしては、空襲で家を失った親戚を受け入れたり、地方の親戚に縁故疎開することもあった。そんななか、家族からの手紙は待ち遠しいものだった。

服装



戦争が進むにつれて、服装も規制されるようになる。男性は国民服、女性はモンペに統一され、簡素化された。物不足から、ボタンは木や陶器で作られたものとなり、モンペだけでなくゲートルや足袋も、着物や帯をほどいて作ったりした。

学校

<table>
<tr><th>年齢</th><th colspan="3">大正８年</th><th colspan="3">昭和19年</th><th>現在
（平成28年）</th></tr>
<tr><td>7</td><td colspan="3" rowspan="6">尋常小学校
（明治19年～）</td><td colspan="3" rowspan="6">国民学校初等科
（昭和16年～）</td><td rowspan="6">小学校
（昭和22年～）</td></tr>
<tr><td>8</td></tr>
<tr><td>9</td></tr>
<tr><td>10</td></tr>
<tr><td>11</td></tr>
<tr><td>12</td></tr>
<tr><td>13</td><td rowspan="2">高等小学校</td><td rowspan="5" colspan="2">中学校・高等女学校・など</td><td rowspan="6">青年学校</td><td rowspan="2">高等科</td><td rowspan="4" colspan="2">中学校・高等女学校・実業学校など</td><td rowspan="2">中学校</td></tr>
<tr><td>14</td></tr>
<tr><td>15</td><td rowspan="4">師範学校・実業学校など</td><td rowspan="4">高等学校・専門学校</td></tr>
<tr><td>16</td></tr>
<tr><td>17</td><td rowspan="2">高等小学校</td><td rowspan="3">高等師範学校・専門学校など</td><td rowspan="2">高等学校など</td><td rowspan="3">各師範学校・専門学校など</td></tr>
<tr><td>18</td></tr>
<tr><td>19</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">大学</td><td rowspan="2">大学・短期大学</td></tr>
<tr><td>20</td><td>大学</td></tr>
</table>

戦時下では学校制度や教育内容も改革された。昭和16（1931）年には国民学校令が、続いて昭和18（1933）年には中等学校令が出される。それにともない、儀式や行事などの団体訓練が重視され、教科書の内容も軍国主義の色の強いものとなる。しかし、戦争の激化とともに学童疎開や学徒動員などが進み、正常な教育は困難となった。戦後、教科書の戦意高揚を謳った文章は、墨で塗りつぶし使用された。

流行

田河水泡は昭和８（1933）年より38年間、荻窪で暮らした
(資料提供：田河水泡のらくろ館)

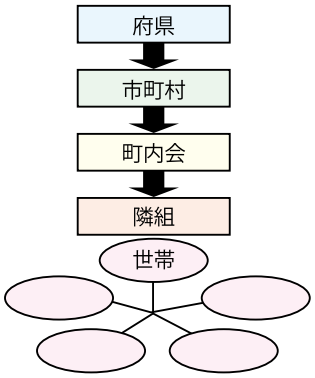
昭和６（1931）年から『少年倶楽部』で連載された田河水泡の漫画「のらくろ二等卒」は、子どもたちの間に人気を博したが、太平洋戦争の始まる頃に連載は一旦打ち切られた。戦時中には軍国ムードを高める軍歌や歌謡曲が流行し、有名な音楽家たちも戦争に関した曲を多く残した。歌や文学など、さまざまな文化活動が戦時統制を受けた時代であったが、「お山の杉の子」など、戦後も国民の愛唱歌として親しまれる曲も生まれた。

子どもの遊び

兵隊ごっこ
木の棒を使ってチャンバラをしたり、
行進を真似ながら軍歌を歌ったりした

人気の遊びは戦前と変わらず、男の子はメンコ、すもう、将棋、女の子はお手玉、ゴム跳び、あやとりなどで遊んだ。しかし、やはり遊びにも戦争が反映され、木の棒を銃や剣に見立てて兵隊ごっこをしたり、口ずさむ歌も軍歌が多くなる。鉄棒やブランコの鉄部分は金属として回収され、遊具は不足していく。そんななか、空襲による落下物は格好のおもちゃとなり、戦闘機の破片を集めたりして遊んでいたという証言もあった。

住民組織



隣組・各組織の役割

- 出征兵士の歓送迎
- 防空演習
- 配給
- 貯蓄の奨励
- 金属の供出
- 言動の見張り合い

など

国民生活を統制するため、住民の組織化が進められた。杉並区でも町会や隣組が組織されたほか、青年会や愛国婦人会なども組織され、防空壕づくりを共に行うなど協力体制をとる一方で、思想などを互いに監視する関係でもあった。なかでも隣組は、近所５軒から10軒ほどで組織され、食料や衣類の配給にはじまり、金属類の回収、兵士の見送り、防火訓練など、日常生活に必要な情報を共有した。

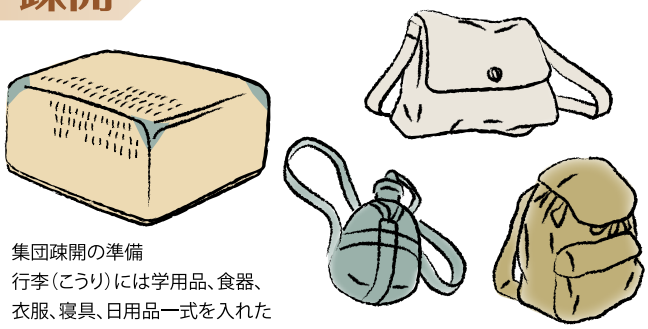
空襲

学校も空襲被害に遭い、高井戸第四国民学校は昭和19（1944）年12月３日の空襲で全焼した

昭和19（1944）年末からはアメリカ軍のB29爆撃機による日本本土空襲が激しくなる。昭和20（1945）年３月10日に大規模な東京大空襲があったが、杉並区への空襲は昭和19（1944）年11月24日に始まり、翌年８月３日まで、計18回を数えた。久我山などには、高射砲陣地が整備された。

人々は空襲警報が鳴るとすぐに防空頭巾をかぶり、庭などに掘った防空壕へ避難した。一方で、「逃げるな、火を消せ」と、人々は手製の「火たたき」で焼夷弾に立ち向かえと指示されていた。

疎開



集団疎開の準備
行李（こうり）には学用品、食器、衣服、寝具、日用品一式を入れた

学童疎開

戦争が激化した昭和19年度から、都市部から農村部へと、国民学校（現在の小学校）の児童たちの疎開が行われた。親戚などを頼って個人で避難する「縁故疎開」と、学校単位で避難する「集団疎開」があり、杉並区では宮城県と長野県の旅館や寺などが集団疎開先となった。体験者の多くが空腹とシラミを思い出として語るように、疎開先でも苦労は絶えなかった。

集団疎開は、昭和19（1944）年６月30日の「学童疎開促進要綱」により、国民学校３年生以上６年生までの縁故のない児童を対象とした。翌年３月には、集団疎開の対象に１、２年生も加えることを決定した。

建物強制疎開

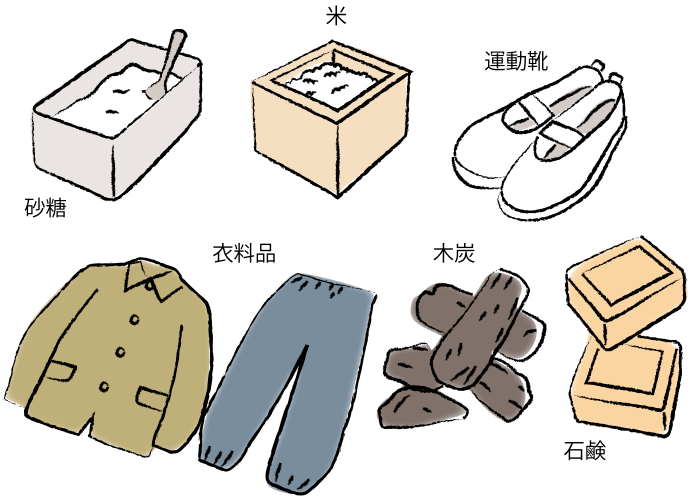
空襲によって重要施設への延焼を防ぐ目的で「防火帯」が設けられ、そこにかかる建物は撤去された。

情報

荻窪文化劇場　かつては高円寺や西荻窪にもあった映画館。そこで放映された日本ニュースで、真珠湾攻撃や学徒出陣の様子を目にした
（出典:『躍進の杉並（昭和28年）』）

国家総動員法などにより言論統制が敷かれるなか、ラジオと新聞を中心とした情報も限られてくる。天気予報すら軍事機密として報道されなくなり、日本の陸海軍部が行った戦況に関する「大本営発表」は、次第に損害を発表しなくなった。そんな国民の貴重な情報源になったのがニュース映画、「日本ニュース」である。昭和15（1940）年から昭和26（1951）年まで制作され、検閲のうえ毎週映画館で放映された。

配給制



戦時下では物資が不足していったため、昭和15年（1940）に砂糖とマッチからはじまり、木炭、米穀、味噌、醤油などの生活必需品が、通帳や切符などによる配給制となった。このとき、隣組などの住民組織の統制力が利用されたが、配給の少なさや遅配のため、住民間の衝突も生じた。戦後、品不足はますます深刻になり、配給だけでは足りないと、政府の統制を逃れた物資が売られる闇市が登場したり、「買い出し列車」に乗って農家に直接買い出しに行ったりした。

ものの値段と単位

●価格の推移

	昭和10年頃	昭和20年頃	昭和22年	昭和50年頃
白米（10kg）	2円50銭	6円	149円	2,495円
教員の初任給	50円	55円	400～2,000円*	81,104円
山手線初乗り	5銭	10銭	50銭	30円
そば（一杯）	10銭	16銭	―	150円
卵（375ｇ）	21銭	1円50銭	約63円	約133円
鉛筆（１本）	3～5銭	20銭	2円	20円

＊教員の初任給は、昭和21年が400円、昭和23年が2,000円。

●尺貫法の換算

長さ	１寸	約3.03cm	重さ	１匁	3.75g	体積	１合 約180cc
	１尺	約30.3cm		１斤	0.6kg		１升 約1.8L
	１間	約1.81m		１貫	3.75kg		１石 約180L
	１丈	約3.03m					
	１町	約109m					

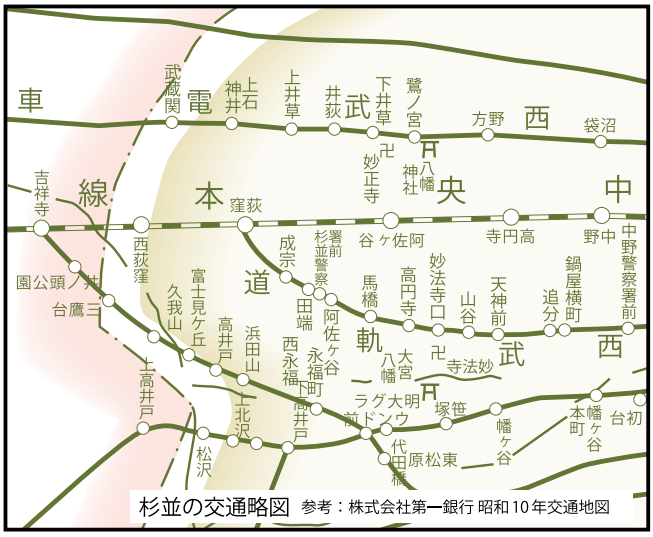
ものによって価値の変化は異なるが、昭和初期の１円は、現在の2,000～3,000円に相当すると言われる。長さや体積などの単位には尺貫法が使われていた。

杉並区の商業・産業

昭和初期からの人口増加に伴って商店も増えた。戦時中は建物疎開や闇市の影響を受けるが、戦後再び発展し、100以上の商店会が誕生する
高円寺駅前の様子（出典:『躍進の杉並（昭和11年）』）

戦前から多くの区民は農業に従事していたが、人口が増えるにつれて商店も増えていった。大きな工場は少なかったが、戦闘機のエンジンを製造していた中島飛行機東京工場や、陸軍より電波探知機の研究を命じられた岩崎通信機（久我山）は、軍需工場に指定され、多くの学生たちが学徒動員で働いていた。明治44（1911）年に高円寺に設立された後の農林省蚕糸試験場は、戦時中は蚕のエサ不足により急激に衰え、戦後、つくば市に移転した。蚕糸試験場の跡地は、現在、蚕糸の森公園となっている。

交通



杉並の交通略図　参考：株式会社第一銀行 昭和10年交通地図

明治期に現在のJR中央線となる甲武鉄道が開通し、荻窪駅をはじめ、大正期には高円寺、阿佐ケ谷、西荻窪に駅が開設される。戦時中も中央線は都心に出る人々や疎開先に向かう児童などによって利用される。また、大正期に開通した西武軌道はのちに都電となり、戦後まで区民に親しまれた。甲州街道や青梅街道、五日市街道といった主要道路とともに、鉄道が整備されたことも、戦前戦後にかけての杉並区の発展を支えた。